



双松会会報

第32号「双松会」通巻36号「松高北高同窓会報」通巻36号

発行 松江市奥谷町164番地 島根県立松江北高等学校内 双松会事務局 TEL: 21-4888
FAX: 21-4977
印刷 株式会社島根県農協印刷 TEL: 21-3476

青春クワイティ Vol.9

高校21期(昭和45年卒)

六〇年代の記憶再び

「青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ」。サミエル・ウルマンの詩「青春」の一節。マッカイサーが座右の銘にしたことから、日本でも広く知られるようになった。六月十一日に開催された二期の還暦記念同窓会は、この一節を思い起こさせた。

二十一期生は十二クラス、四百九十八人。一九六〇年代の終わりを見届けて川津校舎を卒業した。島根原発1号機の本体工事が始まり、大阪万博が開幕した春のこと。高度成長期の終盤で、CMソング「大きいことはいいことだ」が耳に残り、フォークソングとGS(グループサウンズ)全盛の時代。三年後にオイルショックが襲うことなど夢にも思っていなかった。

卒業から四十二年目。母校の校長は今、同期の勝部昌幸君が務める。同窓の校長は歴代六人目で、松本幹彦前双松会会長以来二十年ぶりになるという。同窓会の期日が、東日本大震災から三カ月の節目に当たったのも、何かの巡りに合わせだろうか。

同窓会には百二十一人が出席した。今回の「仕掛け人」で幹事代表の加島幸夫君が趣旨説明。東京から参加した秦(旧姓内田)和子さんが「こ



れからが人生の円熟期」と、白らが打ち込む舞台になぞらえて乾杯の音頭をとった。

立食会場では、思い出話や記念撮影があちこちで続き、進行役の声が聞き取りにくいほど。クラブ活動や名物先生、大学紛争の余波など話は尽きず、名札と顔を見比べながら会場を巡る姿が目立った。沖縄返還を目指した当時の首相佐藤栄作が、ちょうど学園祭のころ、松江で「一日内閣」を開いたことも話に出た。

当時は、先生と酒を酌み交わすことがある一方、全員の模擬試験結果が教官室前に張り出された。今では信じられない光景だろう。髪を伸ばして「イムジン河」を口ずさみ、分厚い「都市の論理」を斜め読みする——そんな「流行病」もあった。そうかと思えば、腕から血を流した先輩が、たまり場にしてきた下宿に駆け込んだ。「やつらチェーン持つちようさがつてー」。「質実剛健」の伝統の



大森 正己

中で、厳しさがある反面、ある種のおおらかさが寛容された時代。誰もが前しか見えず、振り返るのはシューベルツが歌う「風」の中だけだった。

二次会は、会場を隣に移してのフォークソング大会。福田泰輔君と久保田俊也君が待ちかねていたようにギターを持った。「戦争を知らない子供たち」「友よ」「白いブランコ」など十四曲。「イムジン河」「風」もあった。浅野博雄君や門脇憲君が次々に舞台上上がった。

高校時代の写真もスクリーンに映し出された。古ぼけた木造校舎や体育館。クラスごとに幹事が苦労してかき集めた。正面玄関前での記念撮影



や学園祭のスナッパ。「あれが美濃地(忠彦君)だ」。会場から声が飛び、四十一年前の友人・自分探しにしばし熱申した。最後は元応援団長・梅木辰雄君の出番。四十数年ぶりに聞く美声?に先導され、全員で校歌を斉唱し、手拍子で「四十二年目の再会」を締めくくった。六〇年代という時代に、自由な校風と個性的な先生や先輩、良き仲間たちに恵まれたことを感謝したい。七〇年代と同じように今、日本は、大震災・原発事故をきっかけに再び岐路に立つ。冒頭の詩「青春」には「理想を失ったとき初めて老いが来る」とある。「人生の円熟期」を「第二の青春」ととらえ、再び前を向いて歩き出そう。被災した人たちに負けないように。

最後に、昨年八月から準備してくれた二十一人の幹事さん、お世話になりました。(同窓会の写真は宮崎照君の協力で二期のHPに載っています)